
エマニュエル・レヴィナス 『時間と他者』 1948

Le temps et l'autre, 1948; 1979, Fata Morgana, Montpellier; 1983, P. U. F., Paris.

邦訳 法政大学出版局 1986 原田佳彦訳

I

主題と構想 (p. 3～7)

目的：時間は主体と他者との関係そのものである、ということを明らかにすること。

この主張に社会的なもの含まれず、問われるのは、時間の表象でも観念でもない。ここでは「時間そのものが問題とされている」。

孤独の考察の必要性

この分析の性格は存在論的なものであり、そこでは「孤独を存在のひとつの範疇 (category) として提示し、存在の一般的な組成 (economy) における孤独の位置」を明らかにすることが目指される。

ハイデッガーの考え方を棄て去る

『存在と時間』の現存在分析は、孤独の性質に関して曖昧さの内に留まっており、ハイデッガーにおいて他者は、相互共同存在 (Miteinandersein) という本質的な状況のうちに現れるが、それは真理を廻る隣り合わせ (cote a cote) の結び付きであり、向かい合わせ (face-a-face) の関係ではない。他者との本源的関係は前置詞 mit (と共に avec) で表わされるべきものではない、ことを明らかにしたい。

孤独の乗り越え？

孤独を存在論的根源にまで遡ることによって、孤独がいかなる点で乗り越えられるか。それは認識でも、脱自 (extase) でもない。それらは二元性 (dualite) を解消してしまい、他者の消滅に行着く。

苦悩と死

死において、孤独が神秘(mystere)の間近に見出される。神秘であって、必ずしも無(neant)ではない死によって告知される二元性、それがどのようにして他者と時間との関係となるか。

統一性のうちに融合することのない多元論に向けて

<実存すること>の孤独(p. 8~10)

孤独と存在

われわれは様々な存在や事物に取り囲まれ、それらと様々な関係を保っているが、このような関係はすべて他動詞的である。われわれは他者と共にあり、他者を見るが、私は<他者>であるのではない。

レヴィナスは<実存すること>を、これらの他動詞的な諸関係から切り離された私の「絶対的な自動詞的な要素」を構成するものとする。<実存すること>を除けば、すべては存在相互の間で交換可能であり、存在することは、<実存すること>によって孤立することとされる。

原始的心性・融即(participation)

原始的心性にレヴィナスのルールが加えた解釈は、融即によって主体が他者でもあるかのような印象を与えたが、それは脱自的な融合との一致であり、辞項の二元性を十全に保全するものではない。

<実存すること>

<実存すること>は、あらゆる関係、あらゆる多数性を拒絶する。孤独はここに、「実存者と実存するというその活動との間の相互に解消し得ない統一性として、現れる」と説かれる。孤独の乗り越えは、実存者とその<実存すること>との繋がり〔関係、繫縛 lien〕の原理を試練にかけることであり、実存者がそこで実存を結びつけるところの存在論的出来事に向かっていくことである、とされる。レヴィナスは、この出来事を hypostase（位相転換、品詞転換、実詞化）と呼ぶ。

実存者なき＜実存すること＞(p. 11～19)

＜実存すること＞(exister)と実存者(existant)

レヴィナスは、ハイデッガーの存在(sein/etre)と存在者(seiendece/etant)の区別(存在論的差異)を、上記のように翻訳し直し、哲学に付きまどってきたある種の曖昧さを一掃する洞察に富んだものとして評価するが、そこには区別はあっても分離〔切断〕がなく、＜実存すること＞は常に実存者のうちにとらえられている。

被投性(Geworfenheit)

レヴィナスはこれを、「うちに―投げられて―ある―こと」《fait-d'etre-jete-dans》と訳し、そこにハイデッガーの各自性《Jemeinigkeit》からは導きようもない主体抜きで生起する＜実存すること＞、実存者なき＜実存すること＞という観念を切開してみせる。

イリヤ il y a

そしてレヴィナスは、このような実存者なき＜実存すること＞への接近方法として、あらゆる事物、存在、人間の無への回帰を想定する。そこに現れるのは純粋な無などではなく、il y a (がある、それがそこにもつ＝ある)という事実であり、事物と存在の破壊の後に、非人称的な＜実存すること＞の「磁場」があるのだ、と述べている。主語でもなく、名詞でもない何ものか、もはや何もないときに強いられる＜実存すること＞という事実。

＜実存すること＞の匿名性

＜実存すること＞は名詞によっては表現することのできない、動詞であるところの活動そのものであり、肯定や否定を受け付けない。それは存在するものに決して繋ぎとめられるということはない。故にわれわれはそれを匿名的と呼ぶ。

不眠

不眠は「何の目的もない覚醒状態」であり、そこでは時間はどこを起点にするともなく、何ひとつ遠ざかることもぼやけることもない。―il y a との類似性。

このような覚醒状態、自らの制御の外に置かれた＜実存すること＞は、一切の自

己の不在、欠—自 sans-soi であり、即自 en soi ではあり得ない。主体は、それ自体が一つの始まりを内包するものであり、それ故、永遠は、常に既に主体から排除されている。この主体なき、和らぎのなさこそが永遠性である。

il y a とヘラクレイトス

レヴィナスは、il y a という概念を、実存者の統一性、固定性を根こそぎ解消してしまう流体（水）の神話と照応させてみせる。

無の不可能性と無の経験

無なき存在、無の不可能性という考え方を推し進めると、それは存在に対して人が持ち得る最後の支配力としての自殺から、そのすべての権能を奪い去る。それは存在の不条理を、否応もなく指し示す。ハイデッガーにおいては、不安は無の経験であったが、死を無と解するなら、それは死は不可能であるという事実を告げているのではないか、ということが言われる。

眠りと意識の逆説

ここでレヴィナスは、il y a を覚醒状態によって特徴づけることによって、意識そのものが孕む根源的な逆説を切開しようとしている。即ち、覚醒状態の非人称的な状況から、眠るための最後の退去の可能性を保持するものとしての意識。ここでは意識は、眠る能力そのものとなるのではないかと。

位相転換／実詞化 (hypostase) (p. 20～25)

意識と hypostase

意識は il y a という匿名的な覚醒状態の中断であり、それは既に hypostase であり、実存者が＜実存すること＞に関わり合う状況に準拠している。

しかし、われわれはそれが生じる理由を説明することはできない。問うことができるのは hypostase の意義だけである、とレヴィナスは言う。

実存者

「存在する何ものか」《quelque chose qui est》は、その属性(attribut)として<実存すること> l'exister を含み、<存在すること>の支配者である。<実存すること>は「存在する何ものか」に属するのであり、この支配の故に実存者は孤立している。実存者が存在するためには、自己同一性の活動が可能でなければならず、その同一化によって、実存者は自分自身に対して自らを閉ざしたことになる。

hypostase という出来事

hypostase という出来事は現在である。現在は、自己からの出発〔脱出〕であり、<実存すること>という無限の網目に生じた裂け目である。現在は、引き裂き、また再び結びつける。それは始める。始まりそのものである。それは想起というかたちで過去をもつ。それは歴史を持つが、それが歴史であるのではない。

出来事としての現在

ここで問題とされている現在は、時間的要素 element ではなくその機能〔作用〕であり、いわば、それが<実存すること>という非人称の無限にもたらず裂け目が問題となっている。現在は一方でひとつの出来事あり、何ものとしても実存していないが、それによって何ものかが自己から出てくる<実存すること>という出来事である。<実存すること>は動詞によって表現されるべき純粋な出来事であるが、そうであるにもかかわらず、そのなかには既に実存者が存在している。

次第に消え去る現在～始まりということの本質的なあり方（形式）

「我」 le 《je》の両義的性格～それは実体ではないが、すぐれて実存者である。

レヴィナスによれば、これまで自我は、可変的なものと恒常的なものとの対立、言い換えるなら、存在と無の範疇によって無意味な問題を構成していたが、自我を<実存すること>と実存者の境界にあるものとして、hypostase の機能として捉えることによって、この問題を解消できるとしている。

hypostase された時間と hypostase という純粋な出来事としての時間

現在と「我」の実存者への転化は、人に時間を構成させ、時間を実存者として所

有させることもできる。しかし、レヴィナスはこのような hypostase された時間と、純粋な出来事としての hypostase そのものである時間とを峻別する。レヴィナスは、そこに経験とは名づけ得ないような探求の次元を見出している。それは現象学の彼方であり、そこにおいて時間は、＜実存すること＞と実存者とのあいだのもう一つ別の関係を指し示すものとされる。

――われわれは時間によって、現在なるものの一元論的な hypostase を乗り越える多元論的な実存に到達し得ることになる。(p. 24)

始まりの自由

自由意志ならざる自由。＜実存すること＞の主人としての実存者。hypostase が示すこの未分化な自由。

孤独と hypostase (p. 26～27)

孤独は hypostase の活動に起因する、実存者の統一性そのもの、実存がそこから出発して形成されるところの＜実存すること＞のなかに何ものかがあるという事実である。実存者が存在するためには、孤独が必要なのである。

孤独と質料性(materialite) (p. 28～31)

主権の弁証法的逆転・主体の質料性

自己同一性は、単に自己からの出発だけではなく、自己への回帰でもある。実存者はもっぱら自己に関る――主体の質料性：自己束縛

自己に対する束縛としての現在

現在は、過去と未来とに対する自由であるが、それによって自己に対する束縛がある。現在の質料的性格は、それ自身に起因するのであり、現在は無限の＜実存すること＞の網目を引き裂いた。それは歴史を知らず、今から到来する。そして、そ

れ故に現在には責任ということを知り、質料性に転じる。

分身との関係・質料の実存

このような「我」の自己への繫縛は、自我に繋ぎ留められた分身との関係として捉えられる(cf. M. Blanchot *Aminadab*, 1942)。そして、レヴィナスは、ここに、所有するということによる存在の二重化を見出し、そのことを質料の実存と呼んでいる。

<自我>(moi)と<自己>(soi)

こうして質料性は、<自我>と<自己>とのあいだの関係の具体的な出来事として捉え返される。そして肉体が存在論的出来事へと差し戻される。

実存者の決定性—孤独：時間の不在

匿名的なく実存すること>のうちに実存者が出現する。そこに起因する最初の自由は、自己自身に繫縛された我という決定性そのものを代償として含んでいる。レヴィナスによれば、このような実存者の決定性こそが質料性であり、孤独を悲劇的なものとするものである。そして、このような質料の束縛を断ち切ることこそが、hypostase の決定性を断ち切ることであり、同時に（真正な）時間のなかに存在することであると、説かれる。与えられた時間、経験された時間、踏破すべき時間等は、hypostase の結ばれを解くことができない時間であるとされている。

II

hypostase の不幸な状態としての孤独と質料性の一体性

ハイデッガーからの転換

孤独は、死への存在の特権的経験ではなく、質料につきまとわれた日常の実存の伴侶とされる。

救済への関心〔没頭〕としての日常生活

日常生活は、頹落となるのではなく、孤独から流出しそれ自体を完遂させるとと

もに、その不幸に応えようとする厳粛な試みを形成しているのである。

日常生活と救済 (p. 36～41)

孤独の経験と社会的経験のアンチノミー

- ・ 社会的経験の側の楽天的建設主義を脅かす孤独
- ・ 孤独の経験の不安のさなかにおける俗物的関心

アンチノミーの裂け目としての狂気

狂人は、この世界の不安定さと状況の不条理さを明敏に感じ取り、口にする、狂気がそこから流れ込みこの世界を過っていく開口部だが、その世界の帷を引き千切る嵐ではない。

行動と道德の対置

このような反論は、實在論者の觀念論者に対する反駁においてしばしば見受けられるものではあるが、ここでこの反論を無視することができないのは、ここでの行動は道德 moral に対置されているからである。ここではこれらの敵対的経験のそれぞれが一個の道德となっている。それらは互いの真正さ authenticite を問題とする。

革命闘争と經濟闘争

サルトル哲学の天使的現在への批判

孤独と主体の再結合

世界による救済一糧 (p. 42～44)

日常実存のなかで、主体の物質的構造はある程度乗り越えられている。自我と自己とのあいだに生じる隔たり。

糧の総体としての世界におけるわれわれの脱自的実存

ハイデッガーは世界を道具連関の体系として開示してみせたが、レヴィナスは、道具以前に糧の総体であることを強調する。われわれの実存は、糧によって特徴づけられており、それ故、対象による限定を被っている。

自己からの脱出としての享受〔享楽〕によって特徴づけられる対象との関係性

レヴィナスはそのようなわれわれの実存の態様を「享受 *jouissance*」と呼ぶ。それは存在の仕方であり、感覚、従って光と認識でもある。光は、主体を対象との隔たりのなかに存在させる可能性の条件となる。そうして、日常的な生は、既に質料性からの解放を持ち来す態様として捉えられる。

光と理性との超越 (p. 45～47)

光の外在性

自己の忘却、享受の明るさ、といった日常性に刻印された解放の態様は、しかし、主体の質料性から光を切り離してしまうことや、理性の名のもとに光を絶対化してしまうことによって、自我の自己への執着を断ち切れずに、我自身のなかに留まり続けてしまう。光の超越は、内在に包みこまれてしまうのだ。

hypostase による光と認識の出現

hypostase とそれがもたらす弁証法のうちに、光と認識は現れ出たのであるが、理性と光は、それだけでは存在者の孤独という運命を全うするばかりである。

理性の構造としての独我論 *solipsisme*

意識の志向性は、自我と事物の区別をもたらすはするが、独我論を消滅させはしない。志向性の境位 *element* たる光は、われわれを外的世界の支配者 *maitre* にはするが、そこにわれわれに対して同等のものを見出すことはできない。

物質的実存への回帰

III

主体の孤独は、主体の＜実存すること＞との関係に起因し、主体は＜実存すること＞の支配者である。このような支配はまた、始める能力であり、自己から抜け出る能力でもある。

しかし、実存者において、匿名的なく実存すること＞からの解放は、同時に自己同一性の束縛となる。

主体の孤独は、主体が自分自身の餌食として投げ出されている、質料性のうちにある。そして、主体を糧としての世界の前に置くという欲求の超越の瞬間、質料性は主体に、主体自身からの解放をもたらす。

こうして主体は、自己から距離をおいて実存することができるようになる。

享受は、認識であるとともに光であり、そこには自己の忘却、いわば最初の自己犠牲がある。

労働 (p. 53～54)

空間的外在性と瞬間相互の外在性とのあいだの根源的差異

空間による超越は孤独から抜け出させてくれることはなく、光は透明性 intelligibilité そのものであり、すべてを我から到来するものとしてしまい、あらゆる経験を想起 reminiscence の境位 élément に連れ戻す。従って、認識が世界内で、真に他なるものと出会うことはない。

道具は労働を取り除いてしまう

労働によって見出される苦勞と苦痛～実存者の孤独が最終的に還元される現象

苦悩と死 (p. 55～59)

苦痛の分析

レヴィナスは、苦勞、苦痛、苦悩のうちに、孤独の悲劇性を構成する決定性が純粹な状態である、という。ここで、分析されるのは、欲求と労働との苦痛のうちにある孤独についての分析であり、そこで強調されるのは肉体的苦痛である。苦痛は、肉体性のうちに、実存からの不可分性を露にする。

苦悩の本質

苦悩の内実は、それ自身から離脱することの不可能性と混じりあっている。その本質は、常に生へ、存在へと追い立てられているという事実のうちにあり、その意味で苦悩は無の不可能性であり、その不可能な無に対する希求なのである。

死への近さ

苦悩には、それ自体がある絶頂を含んでいることによって、死と近しい関係にある。死は未知なるものであり、それ故、無の不可能性の経験との相関者であるが、それは常に既に未知に留まる。死はまた神秘 *mystere* と関係している。

主体の受動性の経験

死は、主体がもはやその支配者たり得ないような出来事を告知する。

Sein zum Tode 死への存在

ハイデッガーにおける死への存在は、現存在 *Dasein* による実存の最高度の可能性の受諾を意味する、自由な出来事であるが、苦悩において死は、主体を可能性の限界に縛り付ける。死はその意味で観念論の限界である。

絶對的に認識し得ない何ものかを起点として...

死と未来 (p. 60～63)

死の未来性

死はわれわれの未来との唯一の関係であり、永遠の未来である。現在時とは、主体の能動性が、支配者として君臨する事実であり、死はそこに逆転をもたらす。

マクベス

死の切迫性と希望

死の前には、常に最後の運 chance があり、英雄とは、その最後の運を見出そうとする者である。従って、死が引き受けられることは決してない。それは只やってくる。自殺とは矛盾概念であり、死の永遠の切迫性は、死の本質の一部をなしている。主体の支配が顕現する現在にこそ希望があるのであり、希望は、死の瞬間に逝かんとする主体に与えられる余白そのもののうちに存在する。無は不可能であり、《To be or not to be.》は、このような自己を無化することの不可能性の自覚なのである。

出来事と他人 (p. 64～67)

主体の雄々しさの限界としての死

支配の終焉におけるの一つの出来事—死の接近と絶対的に他なる者

死は、投企を持つことの不可能性であり、そのような死の接近は、われわれが絶対的に他なるものである何ものと、その実存そのものが他者性から成っている何ものと関係していることを示している。

実存の多元性

実存は多元的なものであり、それは＜実存すること＞それ自体のうちに現れる。

他者との関係

他者との関係は外在的なものであり、＜神秘＞との関係である。

他者の存在を構成している他者性

＜エロス＞と他者

レヴィナスは、エロティックな関係が、他者との関係の原型をわれわれに提供しているという。

未来の予期と未来の差異～純粹持続を語ることの不可能性

他者と他人 (p. 68～71)

他者と実存者との関係への問い―超越における自我の保存の問題

死のうちに観取された出来事の可能性は、しかし既に主体が出来事の支配者となり得ぬ出来事であり、それは神秘として特徴づけられた。そこでは出来事は、現在のうちに入り込むことのないものとして入り込む。しかし、他者として、私の実存の疎外として告知された死は、どのようにして私を留めるのであろうか。「実存者は、いかにして、死すべきものとして実存し、またそれにもかかわらず、その「人格性」のうちに持続し、匿名的な《il y a》に対する征服、主体としての支配、主観性による征服を保持することができるのだろうか。」とレヴィナスは問う。

死に永遠を迎え入れること

われわれは、死ぬことと存在することを同時に欲する。それ故に、問題は、永遠を死から引き離すことにあるのではなく、それを迎え入れること、ある出来事がその身边に生起する実存のただなかで、hypostase によって獲得された自由を自我に保存しておくことを可能にするところにある、とレヴィナスは説く。

visage との出会い

事物や対象を迎え入れるようには出来事の生起を迎え入れることのない主体が、出来事に正面から立ち向かう死を克服しようとする状況、レヴィナスはこのような状況を弁証法的状況と呼び、これからはその弁証法が完遂される、具体的な状況を明らかにしよう、という。ここに visage との出会いが記される。そして、「引き受けられた」他者―それが他人であるという。

時間と他人 (p. 72～73)

他人との向かい合い le face-a-face という状況に準拠する時間

未来の非時間性

レヴィナスによれば、死がもたらす未来や出来事の未来は、未だ時間ならざるものである。それは現在と関係を結ぶことによって、初めて時間の一要素となる。しかし、この二つの瞬間の間には越えがたい深淵が介在している。

時間の条件

レヴィナスは、現在における未来の現前は、他人との向かい合いのなかで実現すると思う、という。だから向かい合いの状況は、時間の実現そのものであり、現在による未来に対する侵蝕は間主観的關係となる。従って、時間の条件は、人間同士の関係のなかや、歴史のうちに存在する。

IV

死の未来性からの時間理解

絶対的に他なるものとしての未来

現在からあらゆる予測が剥奪されるとき、未来は現在と共通するあらゆる性質を失う。レヴィナスは絶対的に他なる未来、絶対的に新たなものとしての未来に、時間性のリアリテそのものを見ている。

死なき哲学（ベルグソン）への批判

ベルグソンの持続による自由は、未だ現在に、未来に対する何らかの力を残している、とレヴィナスは見ている。持続は創造であり、時間の働きの深さは、現在に繋ぎ留められた創造、魂の状態の更新ということ以上に、全く新たな生誕を意味している。

力と他人との関係 (p. 80～83)

死の克服—出来事の他者性に対して人称的（個人的）関係を保ち続けること

死の未来、その異邦性は、主体にいかなる主導権をも残さず、現在と死、自我と神秘の他者性とのあいだには深淵がある。

人称的關係

人称的關係とは他人との関係だが、他人との関係は、文明レベルの他者との関係を規定する、初源的関係の波乱であり、それは独自の内的弁証法に基づいているとされている。この弁証法は、表現の超越を明らかにしようとするところに現れてくるが、それは常に他者性の未来を前提としている。

關係の不可能性

他者は共感によって、もうひとりの私自身として、もうひとつの自我 *alter ego* として認識される。ブランショの『アミナダブ』において、社会的関係が完全な相互性となっており、人々は相互的であるが故に交換可能となっている。従って、他者との関係は不可能なものとなっている。

他者性の關係

慈悲は他者を優先する

エロス (p. 84～92)

女性的なるもの *le féminin*

レヴィナスは、他者の他者性が純粹なかたちで現れるような状況として、絶対的に相容れない相反者を女性的なるものとして定立する。

性の相違

光から身を隠す存在様式—慎み深さ

伝達 communication の挫折としての自由－ヘーゲルの主奴論

他者性の措定

他者性の範疇－＜実存すること＞のなかでの出来事

他者性は、女性的なるもののうちに自らを実現し、女性的なるものは、慎み深さのうちに存在者 *étant* として自らを実現する。女性的なるものの超越は、他所に身を引くことにあり、意識の動きに反する運動である。レヴィナスは、これを神秘としか他に呼びようがない、と言っている。

エロス

エロスは闘いでも融合でもなく、また認識でもない。エロスの占める例外的な位置、それは他者性との関係、神秘との関係、すなわち未来との関係であり、すべてがそこにある世界のなかで決してそこにはないものとの関係、すべてがそこにあるときにそこにはあり得ないものとの関係である。もはや何も成し得ることがないところで、主体はなお、エロスによって主体であり得る。

性愛の現象学

愛撫

愛撫は、主体が他者との接触においてその彼方にまで達するような、主体の存在様式である。それは、感覚的接触とは異なり、自らが求めるものを知らない。それは、いわば、逃れ行くものとの戯れであり、常に他であり、常に近づき得ず、常に来るべき何ものかとの戯れである。

＜エロス＞による他者との関係

レヴィナスは、他者との関係が融合であるとする見解に対して異議申し立てをしてきた。他人との関係は、他者の不在を意味するのであり、その不在は、未来の地平における不在、時間であるところの不在なのであるという。

多産性 (p. 93～98)

自我が自己に対して他者となること

私が私であり続けることの可能性はどこにあるのか。

父たること

父たることは、他人でありながらも私であるような異邦人との関係である。私が私の息子を持つのではなく、私が私の息子であること、それは私の存在故にそうなのであり、共感によるものではない。hypostase と共に始まる自我の自己への回帰は、エロスによって開かれた未来への展望 perspective により、自由が形成され、時間が実現される。それらは、父というカテゴリーに従って開かれるのである。

非人格的汎神論に向かう elan vital

力という観念から逃れて

これまでの論述の連続性は、現象学的なものではなく、hypostase の自己同一性、つまり自我の自己への隷従を起点に、自己同一性の維持、実存者の維持へと至る弁証法によって支えられたものである。

自由と多数性

他者性は、単に私の自由とは別のもうひとつの自由の実存であるのではない。幾つもの自由の共存は、それぞれの自由の統一性をそのままにしておく多数性というべきものである。あるいは、この多数性は、一般的な意志のうちで一つに結び付いている。

他者性がもたらす<実存すること>そのものに関する二元性

存在のエレア派的観念の乗り越え

隣り合わせの集団性と「我—汝」の集団性